

イザヤ書 25 章 1-9 節

フィリピの信徒へ手紙 4 章 4-13 節

マタイによる福音書 22 章 1～14 節

昨日、わたしたちの教会の大切な信仰の先輩を天国にお送りいたしました。地上にある教会のまじわりは、天ともつながっています。そこが地上の他の集まりとの違いです。その天とのまじわりを大切にする集いとして、これからも教会での様々な活動を盛んにしていきたいと思えます。

先週、先々週と、エルサレム入場後に、イエス様が語られたたとえが続きました。本日は、その三つ目となります。『聖書』の小見出しは、「婚宴の祝宴のたとえ」となっています。今回のたとえも、イエス様が語りかけている対象は同じです。イスラエルの指導者たちです。

2 節に「**天の国は、ある王が王子のために婚宴の祝宴を催したのに似ている**」とあり通り、このたとえも天の国（神の国）のたとえです。それゆえ、福音書の物語の世界を超えて、天の国とのつながりを信じている、マタイ福音書を今、読んでいる教会の人々にも向けられています。同じように、天とのまじわりを信じている、わたしたちにも、このたとえは向けられているといえます。先の二つのたとえでは、イエス様の敵対者たちが厳しく批判されていましたが、それは、本日のたとえでも継続しています。ただし、展開が複雑になっており、彼らへの批判だけではありません。

婚宴のたとえを簡単に振り返ってみますと、このたとえは前半（22：3～10）と後半（22：11～13）に別れます。そして、たとえではありますが、物語の形をとっています。その物語のあらすじは、ある王が王子のために婚宴を催そうと思い、招いていた人々を呼ばせるが、招かれている人々は、招きに応じず、食事の用意ができたことを告げても応じず、自分たちの目的のために行動した。また一部の人々は、なぜか家来を捕まえて乱暴し、殺してしまう。それゆえ王は怒り、軍隊を送って、彼らを滅ぼし、代わりに町の大通りで、見かけた人を誰でも集めるのですが、そこには善人も悪人もいたが、とにかく婚宴の席は一杯になった。ここまでがたとえの前半です。

この前半部分は、なんとも殺伐としたお話と言えますが、後半部になると、さらに理不尽さも加わります。王が客を見に行くと、そこには礼服を着ていない人もいたので、王は、礼服を着ていないことを理由に、彼らを暗闇に放り出してしまふのです。準備もなしで無理やり連れてこられて、礼服を着ていないからと放り出されるのですから、なんとも乱暴です。しかし、イエス様は、たとえの最期を、「**招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない**」と語り、たとえ話全体を締めくくります。最初に天の国はとありましたから、天国は、招かれる人は多いが、入れる人は少ないということである、そのように言っているとしか思えません。

このたとえでは、最後に登場する「礼服」が大切な意味を持つといえます。それでは「礼服」を着るとは一体どういうことでしょうか。マタイ福音書が書かれた時代と同時期のユダヤ教のラビの一人が、イエス様と同じようなたとえを用いて、「礼服」を着ることを、「律法」を守ることにしました。おそらく、マタイ福

音書の読者にとって、その点は同じだと思います。ただし、律法を守ることに  
いて、基本となる点が異なります。「律法」を守ることの基本が、イエス様の教え  
にあるからです。

マタイ福音書には、有名な山上の説教をはじめ、様々なイエス様の教えがあり  
ます。その中で、基本といえるのは、マルコ福音書にも記されている愛の二重命  
令です（マルコ 12：28-34、マタイ 22：34-40）。つまり、主なる神様を愛するこ  
とと隣人を愛すること、この二つは、二つではなく一つである、同じあるという  
教えです。つまり、「礼服」を着るとは、主なる神様を愛することと隣人を愛する  
ことを、それを同じこととして、律法を解釈し、実践することである、マタイ福  
音書を読んでいた教会の人々は、そのように受け止めたと思います。いかにえら  
ば、そのように律法の実践を徹底していたということです。そして、そのような  
歩みは、現代のわたしたちにとっても大切です。

「主なる神様を愛すること」、それは熱心に礼拝し、祈り、教会のまじわりを支  
えることでしょう。それは天とのつながりといえます。マタイの教会は、この点  
を第一にして、隣人も教会の中の人として徹底しようとしていたと思いますが、  
教会が全世界に広がった現代では、それだけでは「隣人を愛する」ことになりま  
せん。「隣人を愛すること」、文字通り自分たちが生きている社会でのつながりの  
なかで、出会う人々を大切にすることです。社会事業やさらには行政、政治へと  
展開する場合もあると思います。マタイの教会の人々は、そのような広い視点  
を持っていなかったと思います。そして、それが地上でのつながりであるがゆえに、  
過度にその点を徹底した場合、天とのつながりがなくなり、「主なる神様を愛する」  
ことから離れる場合があります。隣人を愛することに天とのつながりが必要かと  
思う人もいるかもしれませんが、人間は完全ではありません。主なる神様を愛す  
る視点がないと、何が愛であるかという基本が不明になるのです。

本日のたとえが示した「礼服」を着ること、それは、主なる神様と隣人とを同時  
に愛することです。それは明確ですが、実行は簡単ではありません。また、それ  
を一人で背負ったら大変です。しかし、だから教会があるのです。教会で支え合  
い、補いながら行うことが大切なのです。また一つの教会だけでも大変です。だ  
からこそ教会同士が補いながらそれを行うことが大切なのです。

本日の旧約日課には、ほとんど触れませんでした。イザヤ書 25 章 1～5 節に  
あるのも殺伐とした光景です。なぜなら、世の終わりを語っていると思われるか  
らです。しかし、それがあからこそ、6 節以下の言葉が続きます。そこにあるの  
は復興の希望です。世界の終わりは、破壊で終わるのではなく、希望が始まる  
という意味での終わりなのです。イザヤ書は、バビロン捕囚という神の王国の滅亡  
を通して、世界の終わりに起きる本当の希望を語ったのでした。わたしたちにと  
ってそれは、イエス様によって示された、復活の希望です。それゆえ、この箇所  
は、教会では総葬式や逝去者記念礼拝で用いられます。昨日もお読みしました。  
現代も各地で起きている殺伐とした破壊的な出来事、ことにわたしたちの  
聖地である場所においても起きている、大変悲しい出来事、それらが一日も早  
く御心にかなった形で終わり、傷ついた一人一人に慰めがありますように祈るこ  
とが真に求められます。しかし、世界にそのような悲しみがあるからこそ、イエ  
ス様が示してくださった愛を実践することが大切なのです。その務めを担う教会  
の責任は、今もこれからも重いと思います。わたしたちの教会なりの方法で、主  
なる神様の御心にかなう「礼服」を着られるように、歩み続けたいと思います。